庶務掛	事務嘱託	東京音楽学校書記	赤川寅太郎	大13、昭2
庶務掛	事務嘱託	東京音楽学校書記	高橋磯三郎	大14～昭2 昭5～6
庶務掛	事務嘱託	東京音楽学校嘱託	加納　政市	昭4～6
	楽器調律嘱託	東京音楽学校助教授	片山潁太郎	昭4
	楽器調律嘱託	東京音楽学校助教授	太田　太郎	昭5
雇		東京音楽学校雇	原田　兼吉	昭4
雇		東京音楽学校雇	西須　　勇	昭5
雇		空欄	濱田（石田）濱子	昭1、昭3

（五）第四臨時教員養成所の思い出

以下三篇は、編集委員会の依頼に応じて執筆されたものである。

第四臨教の頃

取手市台宿　原口桂子

昭和六年頃の上野公園はゆったりとして居りました。学校は木造二階建て、学校と寄宿舎は廊下つづきでございました。

木造二階建ての寄宿舎は明るい方が多く、楽しうございました。起床、就寝時間は、自由、お食事は一定の時間内であれば、広い食堂で、都合のよい時いつでもとることができました。献立は舎生が順番に作り、舎監の先生に見ていただき、お炊事をして下さる何人かの方たちが作って下さいました。日曜日の寄宿舎は教会へいかれる方が多く、夏休み、冬休みが近い夜、賛美歌の合唱が聞こえる部屋があり、和やかな空気で一杯でございました。

七月本入学の試験があり、合格いたしますと、墨と筆が用意された奏楽堂で、一人ずつ姓名を書きました。七月までは男子十名、女子二十名でございましたが、その後男子九名、女子十八名になりました。

東照宮の鐘と寛永寺の太鼓が毎朝寄宿舎に響き、日暮れの公園は、長い棒を持って走る人から灯されるガス灯で、淡い緑の光が美しうございました。ホーホーと梟が鳴く夜の寄宿舎の一部にも、その淡い緑の線が。金曜日、ザックザックと小砂利を踏んでレッスンに、海軍軍楽隊の方たちが来校。その小砂利の足音は一人かと思うほど、揃っておりました。樹木の若葉に「ああ初夏」と、爽やかな思い出もございます。外出帰りのある夕暮れ、美術学校のお庭から流れる謡曲に立ち止まった思い出。いつの間にか長い年月が過ぎましたけれど、私にはあの頃が今もそのまま残っております。

（平成十年二月）

（第八回生。在校期間は昭和四年四月から六年三月）

第四臨教とその後

広島市佐伯区吉見園　戸田繁子

一九〇八年生まれ。

一九二三年、高等小学校を卒業し、島根県立女子師範学校一部入学。鈴木きく先生（甲師卒）、林（長崎）照子先生（臨教卒）、八木真平先生（甲師卒）の三人の先生のご指導を受けました。

一九二七年に女子師範を卒業して、島根県飯石郡吉田村小学校に赴任。吉田小学校には、〝山長者〟田部長右工門さん寄附のベビーグランドがあり、ピアノの弾ける人をとのことで就職いたしまし

た。当時の義務年限に従い三年間勤めましたが、その間さらに学びたく受験準備のためトラックに便乗したりして、飯田忠義先生（甲師卒）のご指導を受けるため松江までレッスンに通いました。無事合格させていただきました。入学式後乗杉校長先生に校長室に呼ばれ、「飯田君から聞いたけどよく勉強したね」とねぎらっていただきました。

入学後、ピアノは遠山つや先生、声楽は田中伸枝先生のご指導を受け、二年間一生命勉強しました。卒業の春、田中先生ご出産のお祝に慶應病院に若山八重さんたちと参りました。その時の赤ちゃんが田中希代子さんです。

無事卒業、就職難の時代で東京に留まるようにすすめてくれる友もありましたが、すでに父は亡く、母が一人住む郷里島根に帰り、島根県立今市高等女学校（現・出雲高校）で励みました。

その頃から音感教育が叫ばれ出し、大阪音大の永井幸次先生のおはからいでたびたび研究会があり大阪まで出かけました。遠くて不便なので、一九三六年兵庫県立淡路高等女学校に転勤。当時音感教育の集りに六十数名集りましたが、一人また一人と落伍いたしました。当時小学校（金富）音楽専科の佐々木幸徳（基之）先生も講師としてご指導下さいました。絶対音感をつけるのではなく、和音分離唱を基礎にした合唱、ピアノ指導を提示いただきました。当時神戸女学院在職の美田節子さんと毎週のように淡路洲本と神戸を往復し、美田さんともう一カ月頑張ってみましょうと励まし合いつづけました。戦争戦後となり、一九三六年、私は海を渡り奈良県立高田高等女学校に移り、前任の派手な発声練習をなさった先生の後任で校長先生からはよく思われていなかったようです。淡路高女では吉田宇一校長先生から、先生が苦しんでいる時は必ず生徒は何か大切なものを受けると励まされました。

終戦後の一九四七年から、広島県立上下高校に勤めました。分離唱を主体にした合唱指導の信念を通しました。分離唱を主体にした合唱指導は田舎町の高校生に感動されながらつづきました。合唱コンクールにいい成績を取るような合唱ではなく、そんな現実からはお粗末なコーラスだったかも知れませんが、分離唱を主体にした純粋なハーモニーは何十年すぎても忘れられないと当時の仲間が私が上京するたびに集ってくれます。停年退職の年齢になっても上下高校のおんぼろ校舎教室のハーモニーは忘れられないようです。

音感教育〝耳を拓いて心までの教育〟にはやはり幼い日に始めないと出来ない限界があります。一九五八年に学校を退職してから、学校教育でない幼い日から始める〝耳を拓いて心まで〟の音楽教育を始めました。それが私の生涯の生甲斐になった「杉の子会」での音楽の基礎教育です。

現在私は幼い子供たちを相手にしての毎日です。快食、快眠、快便、歯みがき程度のピアノを子供たちに迷惑をかけないために毎日練習しています。幼い日に学べなかった私たちにできない力を子供たちはそれぞれ身につけてくれます。

幼い日から学び力をつけた仲間が幼い日に学べなかった私どもにない全調子感、初見、暗譜の力を身につけ純粋な気持で助けてくれています。そして次の世代の子供たちのため協力してくれ、私は感謝で一杯です。

子供たちに生かされて私は生かされているのでしょうか。プロの音楽家になれるのは才能にめぐまれた少数の人ですが、美しい音楽を感じ妥算のない清らかな心で、拓かれた耳でいい音楽を聞くのは誰にでもできます。

私のしてきたさゝやかな音楽基礎教育が少しでもお役に立てば大変幸せでございます。

（平成十年三月二十九日）

〔第九回生。在校期間は昭和五年四月から七年三月。「杉の子会」主宰〕

私の大切な心の絵巻物

大分県玖珠郡　山上　順

一、受験の頃

大分県の片田舎から何も分からないで昭和四年三月、甲種師範科を受けて落ちました。四月から渋谷の常盤松（正式の名前、東京女子音楽学校）で受験勉強をいたしました。先生方は皆、上野出の方（新卒の方が多かった）で受験科目のすべてをみっちり教えて下さいましたが、昭和五年三月の甲師をまた落ちました。家は一人っ子で帰れ帰れと言われましたが、すぐその後の臨教入試を受けて合格いたしました。臨教でも合格したのは、九人に一人とか十人に一人とかいうことでした。合格者二十五名のうちピアノ科を受けていた人四名、師範学校を出た人や小学校の先生をしていた人五名位（この方たちも甲種師範科を受けたと思いますけど定かではありません）、あとは女学校を出て甲師を受けた人（私もその一人）、そんなクラスメートでした。入試方法は甲師の時と全く同じ方法でした。年限が短いのでその分授業時間数も多く毎日一生懸命やりました。週二回のピアノのレッスンが一番大変でしたが、そのありがたさは卒業して後よく分かりました。

二、授業内容

昭和五年四月、二十五名（男子八名、女子十七名）入学しました。授業やレッスン内容はほとんど甲種師範科の方と同じようでした。

ピアノは週二回あり、九十分のレッスンの中で二人か三人受けました。田中規矩士先生が男子六名、遠山つや先生が女子六名、山越八重子先生が女子六名、見田公子先生が女子五名を担当。山越先生はきれいな先生で優しくよく教えて下さいました。オルガンは真篠俊雄先生が男子二名を担当。ヴォーカル（週二回）は木下保先生が男子八名全員を三人、三人、二人の三回に分けて、田中伸枝先生が女子九名を三人ずつ三回に分けて、澤智子先生が女子八名を三人、三人、二人に分けて担当。田中先生は田中希代子さんの母上です。私どもの卒業前に生まれた希代子さんは、可愛い赤ちゃんでした。田中先生ではイタリア歌曲やシューベルトの三大歌曲集の中のものなどを原語で歌いました。週二回だったのでしょう。澤先生ではオペラの中のアリアも歌ったと聞いています。コールユーブンゲン（週二回）は澤崎定之先生が担当。男女別々に一人ずつ歌わされました。音程の細かい注意をよくしてくれました。混声合唱と指揮（週二回）は岡野貞一先生が担当。指揮と伴奏が前もって決められ、混声合唱を楽しくやっていました。先生の姿を懐かしく思い出します。奏楽堂での全校生徒の合唱（週二回）は一年の時はラウトルップ先生、二年ではプリングスハイム先生が担当。二年の時は、

第九シンフォニーの第四楽章、その他の合唱をしました。

その他の授業は、音楽史（週二回）を太田太郎先生、音楽通論（週二回）を真篠俊雄先生、和声（週二回）を片山穎太郎先生（和声は難しかった）、国語（週三回）を近藤忠義先生（更級日記、西鶴など）、英語（週二、三回）を馨壽夫先生（リーダーでは「クオレ」もやりました）、ドイツ語（週一回）を太田太郎先生（基礎を習いました）、教育音楽もしくは教育心理学（週二回）を木内先生が担当。体操（週二回、その頃は体育とは言わなかった）を新諦五郎先生が男子担当。教練その他は八名なので他のクラスと一緒だったと思います。秋山操子先生が女子担当。他のクラスの女子と一緒に体操服に着替え三十人位でした。みんな何となく開放感があってか遊び半分で先生を困らせたのを思い出します。

授業の他に、校友会の合唱（何曜日かの放課後だったような気がします）を大塚淳先生が担当。短い合唱曲、歌いやすい曲などでした。

三、在学中

寄宿舎での生活でしたが、今思うと本当に粗末な寮でした。でもみんないい方ばかりで仲良く過ごせて幸せでした。毎日の授業やレッスンは自分が好きで選んだ途を同じ思いの友人たちとやるのですから厳しさの中にも楽しい日々でした。創立記念日、予餞会、寄宿舎の送別会など、楽しい思い出もたくさんあり、皇太后陛下の行啓には感激したものです。とくに昭和六年六月十四日に日比谷公会堂で行われた定期演奏会の感激は今でも忘れられません。当時の日比谷公会堂といえば今日のサントリーホールにも匹敵する会場です。夏でしたので女生徒はちぢみの藤色の紋付きに紫紺の袴でした。曲名はベートーヴェンの第九交響曲で[1]、合唱メンバーは第二楽章終了後数分の休憩中舞台に上り、第三楽章は椅子にかけて待ち、終楽章で一斉に起立して歌いました。卒業生を送る会の前はクラスメートのKさんの知り合いの谷中の日本舞踊の師匠さんの所に通って特訓を受け、当日はそろいの衣装で踊り好評でした。また、在学中はよくコンサートに行き、オペラも見ました。夜ですから、その頃、円タクといった一円タクシーに乗って友達三人か四人で往復しまして、ずいぶん贅沢なことをしていたと思っていました。

四、卒業後

昭和七年三月、二十五名無事卒業させてもらいました。就職も三月末教官室に呼ばれ、「佐賀県立唐津高等女学校に俸職すべし」という文部省からの辞令をいただいたときは、いい学校に就職できたうれしさよりも責任の重さに胸がどきどきしたのを思い出します。待遇も甲種師範科の方々と同じで、初めての給料をいただいたときはこんなにたくさんいただいていいだろうかと思ったほどでした。三年九カ月、楽しく勤め結婚のため退職いたしました。その後昭和十五年、主人は召集を受け、昭和二十年の春戦死しました。そのの ち私は昭和二十五年より家から通勤できる県立日田高校の教諭となり、定年までその学校に勤めました。長い間のブランクで初めはちょっと不安でしたが、上野で音楽教育を受けたおかげで自信をもって勤められ、教え子たちと和やかな気分で音楽教育に打ち込んでいけました。これはすばらしい教育方針のもとに音楽教育を受けさせて下さった乗杉校長先生のおかげと心より感謝いたしています。退

職後は子供たちにピアノを教えるのを生き甲斐に続けていました。今でも八十歳になる教え子や日田の教え子より電話やお手紙をもらい、七十七歳の喜寿には日田高の音楽部員だった人たちが集まってすばらしいお祝いをして下さいました。その後も八十歳までは元気でいたいと願っていましたところ、この秋で米寿を迎えわれながら驚いています。昨夏数え年八十八歳のおり、子供や孫たちが全員集まって賑やかな一時を過ごしました。最近は年をとりすぎまして少しばかりの野菜を作ったり草花を育てたりしながら、ほんの少数の弟子たちとのふれ合いを楽しみにしています。お友達もあちこちにいますけど、今でも青春時代を共にした上野の頃の友達とのつき合いがずーっと続いていますし、何でも話し合える大事なお友達です。

五、クラスメイトのこと

男子の方は八名全員亡くなられました。女性は六名亡くなられ、ただ今は十一名、まあまあの健康状態のようです。話はまた前に戻りますが、「卒業三十周年」のクラス会を昭和三十七年懐かしい音楽学校の講義室でさせてもらいました。（それ以前はお勤めや子育てや戦争も続き、なかなか集まるどころではありませんでした。）それ以来、平成三年までに十八回クラス会をし、青森、東京（四回）、京都、横浜、名古屋、四国、山陰、九州（四回）等々と楽しい一時を過ごしましたが年老いて集まることができなくなりました。昭和三十年頃は男性の方四名、大阪、岡山、福岡、札幌等で女子大音楽科の教授をしていました。（あと四名はすでに亡くなっていました。）女性も五、六名、教育大や短大音楽科に勤めていましたが、最近は家でピアノを教えたり歌の指導をしたりして楽しんでおられる様子です。私も命果てるまで音楽とともに生きられる喜びに感謝いたして一日一日を過ごしています。

（平成十年二月初筆、平成十一年十二月加筆）

〔第九回生。在校期間は昭和五年四月から七年三月〕

（1）本書『演奏会篇第二巻』にプログラムと当日の写真が掲載されている。合唱メンバーの女生徒たちは当時の服制に従い、紋付き袴姿である。プログラムには「合唱東京音楽学校生徒」と記され、臨教生徒を含む全校生徒総出演であった。

九　上野児童音楽学園

上野児童音楽学園は昭和八年六月に開園した。これより二年ほど前、乗杉嘉壽校長はヨーロッパ視察を命じられている。各国の音楽学校、音楽教育事情、そして音楽の社会的施設の視察などを目的とする約三ヵ月半のヨーロッパ滞在中、校長はイタリア、ドイツ、オーストリア、フランス、イギリスなどの長い伝統をもつ音楽学校を訪れ、庶民と学校との交流、社会へと開かれた音楽学校の音楽堂、音楽学校のオーケストラと職業的オーケストラとの互角の活躍などを目の当たりにした。視察先での所感の数々は当時の同声会報に寄稿されている。その内容は、視察先の校長についての印象、男女共学の教育システム、校舎改築の理念など多岐にわたり、さらには将来東京音楽学校が新しい奏楽堂を建設する時には現在地に建設し、旧来の奏楽堂を少し離れたところに残すのが望ましいとする構想におよぶ（今日、これは図らずも現実のものとなっている）。東京音楽学校を世界に通用する音楽学校に育てようとする情熱に溢れた文章は、鋭い先見性に富み、今日なお啓発的である。「一日も早